

# プラサンナパダー第一章における知識説批判について

松本恒爾

Mūlamdhymakakārikā (以下 MMK) に対する注釈書 Prasannapadā (以下 PP) Chap.1 で、その著者 Candrakīrti (530-600 頃) によって、ある仏教論理学者の認識論に対して一連の批判が行われている。この仏教論理学者とは、Dignāga (480-540 頃) を指すと考えてほぼ間違いないと考えられる。何故ならば、ここで批判される学説は Dignāga の著書 Pramāṇasamuccaya (以下 PS) と、それに対する彼自身による註釈 (vṛtti/ 以下 PS[V]) Chap.1 にほぼトレースすることができるからである。今回の発表では、PP Chap.1 で行われる認識論批判の中でも特に知識説批判について考察した。

まず、知識説批判以前に、Dignāga が認識手段 (pramāṇa) によって認識対象 (prameya) を限定したことについて Candrakīrti により批判が行われている。Dignāga は「認識対象の理解は認識手段に依拠する」とし認識対象を自相 (svalakṣaṇa) と共相 (sāmānyalakṣaṇa) にの二つに限定した。しかし、相 (lakṣaṇa/ 特徴付けるもの) といった場合、所相 (lakṣaya/ 特徴付けられるもの) が考慮せられて当然であると Candrakīrti は言う。ここで、Candrakīrti がいう所相は、なにかしら事物の背後にある「もの自体」を意図していたのではなく、私達が一般的に考える事物—例えば(青く、丸い)瓶等—を意図していたのだろう。

自相である「(瓶の)青」を認識するということもあり得るが、それだけではなく、所相である「(青く、丸い)瓶」を認識するということが「世間の人々の慣習」で認められているので所相をも認識対象しなければならない。しかし、Dignāga の認識手段には所相を認識対象とする認識手段が想定されていない。それ故に、Dignāga の認識手段に対する説は誤りである。これが知識説批判以前に行われた Candrakīrti の批判である。さて、このような批判をうけた Dignāga によって相でありかつ所相であるものがあると次のような反論がおこなわれるであろうと Candrakīrti は考える。

[知識説批判の導入部]<sup>1)</sup>

「さて、(Dignāga は) こういうのかもしれない。知識に行為作具性があり、さらに、それ(知識)は(認識対象としての)自相に含まれるあり方であるから、これ(自相が行為対象性と行為作具性をもつこと)は過失ではない。」

ここでの知識の行為作具性 (karaṇatva) とは「知る (jñāna)」ということであり、知識が自相に含まれるあり方というのは、知識の行為対象性 (karamatva) であり、「知られる (jñeya)」ということである。実は、このような知識説は PS[V]Chap.1-v.9 においてトレースすることが可能である。そうするならば、PP でいわれる知識の行為対象性と行為作具性とは、それぞれ PS[V] でいうところの知識の「(知識)自身としての顕現 (svābhāsa)」と「境としての顕現 (viṣayābhāsa)」とであることが理解できるだろう。つまりは、この知識説批判とは知識の二相性批判なのである。

さて、この知識の二相性について Candrakīrti がいかなる批判を行っているかといえば、次のようである。

[知識の二相性批判]<sup>2)</sup>

「答える。ここでは、諸存在の他者と非共通である自身の本質、それが自相である。例えば、大地の

堅さ、感受の経験、識の境を表象することである。『実に、それによってそれが特徴付けられる』として、さらに（世間での）成立に随う語義解釈を避けて、(Dignāga は、識の) 行為対象の成立を認めている。しかし、『識は行為作具というあり方である』(と) 説明しつつあることで、『まさに、自相こそが行為対象である。けれども別の自相は行為作具というあり方である』とこう言ったこととなる。その場合、『もし、識の自相が行為作具であるなら、それには（識とは）別の行為対象があるべきである。』ということ、これこそ誤りである。』

この批判も要するに、この学説が「世間の人々の慣習」から逸脱していると指摘しているのに過ぎない。つまり、識に行為作具性（＝知る）という自相が認められている以上、それには行為対象性（＝知られる）という自相は認められないということである。この後にも、同じような議論が続き、最終的には自己認識 (svasamvitti) 批判も行われるが、それらすべての批判が「世間の人々の慣習」から逸脱しているという結論に導かれている。

### [参考文献]

- ・丹治 昭義  
1988 ; 中論釈 明らかなことば I ; 関西大学出版部 .  
1993 ; 実在と認識 中観思想研究 II ; 関西大学出版部 .
- ・服部 正明  
1968 ; On Perception: Being the Pratyakṣapariccheda of Dignāga's Pramānasamuccaya from the Sanskrit Fragments and the Tibetan Versions ; Harvard University press.
- ・de Jong , J. W.  
1978 ; Textcritical Notes on the *Prasannapadā* . ; Indo-Iranian Journal 20 pp. 15~59, pp. 217~252.
- ・Louis de la Vallée Poussin (LVP)  
1903-13 ; Mūlamadhyamakakārikās (Mādhyamikasūtras) de Nāgārjuna avec la Prasannapadā  
Commentaire de Candrakīrti Bibliotheca buddhica 4 ; St. Pétersbourg, 1903-1913 ; reprint  
Osnabrück 1970.

### 註

- 1) Cf. LVP [1903-13] p.60 l.4.  
atha syāt, jñānasya karaṇatvāt tasya ca svalakṣaṇāntarbhāvād ayam adoṣa iti //
- 2) Cf. LVP [1903-13] p.60 l.4~p.61 l.2. (イタリックは de Jong [1978] による。)  
ucyate / iha bhāvānām anyāsādhāraṇam ātmīyaṃ yat svarūpaṃ tat svalakṣaṇam, tadyathā pṛthivyāḥ  
kāṭhinyam vedanāyā *anubhavo* vijñānasya viṣayaprativijñaptiḥ, tena hi tal lakṣyata iti kṛtvā  
*prasiddhyanugatām* ca vyutpattim avadhūya karmasāadhanam abhyupagacchati / vijñānasya ca  
karaṇabhāvaṃ *pratipadyamānenedam* uktaṃ bhavati, svalakṣaṇasyaiva karmatā svalakṣaṇāntarasya  
karaṇabhāvaś ceti / tatra yadi vijñānasvalakṣaṇam karaṇam tasya vyatiriktena karmaṇā bhavitavyam  
iti sa eva doṣaḥ /

(大学院仏教学研究科仏教学専攻博士後期課程)